



島を次代につなぐ「写真」と「空き家模型」

「地域の宝」を 視える化！

人口80人、瀬戸内海の「水仙と灯台による癒しの島」である笠岡諸島・六島(岡山県笠岡市)。人口減少、高齢化率54%と地域の担い手の高齢化により、地域外の若者を活用したまちづくりへ。「写真」を使って地域の昔話と笑顔を発掘、空き家率79%の現状を一目で伝える「集落の模型化」を通じて、地域の人の心と自治体を動かした。



人口減少と高齢化



六島は、「水仙と灯台」の島で知られ、特に2、3月は、水仙のシーズン。今までの島づくりにおいて、水の環境整備に尽力してきた結果、島の人口80人の10倍以上に当たる1000名以上が観光に訪れるようになった。その中、観光客に対して、婦人会が中心になり、「公民館を活用して「ふれあい喫茶」を開設し、軽食とくつろぎ空間を提供しているが、多くの観光客に婦人会だけで対応するのに限界が見えてきた。人口減少と高齢化によって、自治会、婦人会をはじめとした「地域の仕事」は、特定の人に集中しがちな現状である。

島観光のサポート

そのような状況で、2、3月に埼玉、奈良から2名のインターン生が島の観光をサポートしにやってきた。観光客の目当ては、水仙。そこで、随時、水仙の開花状況がわかるように、毎朝、定点で写真

を撮り、ブログで発信した。また、ふれあい喫茶へ来られるお客さんへの接客、お土産販売、小学校では5、6年生の授業支援を行った。

松本君は、烏ランニング、ドラム街会議を通じ、島の人たちは昔の話になると会話のテンポが上がること気づいた。

二石さんは、島を歩き回ると、想像以上に空き家が多く、また古き良き昔の暮らしを彷彿とさせる空き家や街並みに、新たな島の魅力を感じた。

宝と課題の視える化

松本君は撮った写真に島の一人ひとりが持つ知恵、知識、技を写真に書いてもらい、アルバムとしてまとめることで、改めて魅力に気づくことができるようになった。

二石さんは1つ集落を調査し、84戸中定住が17戸、夏など一時帰省の空き家が61戸、全半壊が6戸であることがわかった。しかし、島の人が多くは空き家の多さと空き家が資源になりうることに気づいていないと感じ、現状と資源になりうることを伝えようと、小学校の空いた教室を借り、子どもや地域の方に手伝って

もらいながら、集落の模型づくりを始めた。

空き家の地域資源へ

そして、最終発表会。島外からもインターン生の取組を見ようという応援団が足を運んだ。松本君のワークショップでは、130枚の写真を中心に、島の方々が写真に思い出や説明を入れていく。そこにはなんと、今までまちづくり協議会に関わりがなかった人も。松本君が島を動き回ると、つながりができたのだ。

二石さんのワークショップでは、模型に、住んでいる家と空き家を色分け、水仙が咲いている場所を黄色、住んでいる家にはピンで「○○さん」を表示、思い出を書き込んだり、島の方々は、「空き家の現状に初めて気がついた」「何かしないといけないな」と声があがった。

そして、水仙のオフシーズンであり、整備をする夏の時期に、大学生に来てもらい、その宿泊先として、空き家を整備する案が提案された。その提案を受け、市役所は空き家を資源化する支援を決定し、島は次なる挑戦に応援団の方々と動いている。

インターンシップ相関図

インターン生

二石 菜々子

奈良女子大学生活環境学部2年
インターンシップ期間：2013年2月～3月(2か月間)

将来、地域の人たちが地域に根差した生活のできる地域づくりに携わりたく、地域の実情を知りたい。



子どものえがおが一番！

コーディネーター
藤井 智晴

二人の島での挑戦は、島の方々が資源になりうる「空き家」の実態に気づき、行政は、その空き家対策への支援へ。島に地域の課題を資源にし、動いていく「きっかけ」をつつてくれた。



NPOエリア・イノベーション

http://blog.canpan.info/area-i/
岡山県岡山市北区東町1-4-64 上之町ビル4階
TEL:050-5866-2010/FAX:086-224-0997
E-mail:info@area-i.org

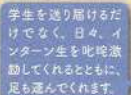
インターン生

松本 一希

前橋工科大学工学部2年
インターンシップ期間：2013年2月～3月(2か月間)

将来、離島で農業をしたいと思い、瀬戸内海の六島の生活をはじめ、もの、こと、人に接したい。

島の事を「楽しんでやる」という視点を教えてもらいました。



学生を送り届けるだけでなく、日々、インターン生を叱咤激励してくれるとともに、足も運んでくれます。

島全体が大きい家族のように、私達のことを受け入れてくれました

受け入れ先
六島まちづくり協議会
三宅 忠信 会長

六島は、人口減少と高齢化で、地域の人だけで地域のことをするのが、なかなか難しくなっている。また、六島を外の目から見てもらい、率直な意見をもらいながら、島のまちづくりを少しでも前に進めていきたい。

インターンシップが地域に与えた影響

- (1) 動き回り、島民と話すことで、新たな島民がまちづくり協議会の取組に参画へ
- (2) 空き家の現状に危機感が芽生え、空き家の資源化へと行政も動かしだ
- (3) 島外にも「六島ファン」を作り、「応援団」コミュニティが出来た

チャレコム事務局の注目ポイント

人口80人で高齢化率54%。このような離島で、地元住民だけでまちづくりを行うのは容易ではない。様々な利害関係があり、また、全ての地域資源が「あたり前」として認識され、客観的価値が見出されにくいからだ。高齢化で新たな第一歩を踏み出す人材が現れにくいという側面もある。そうした環境で、異外から来た2人の若者によってもたらされた、島への誇りや希望、挑戦への勇気といった「目に見えない成果」にこそ注目したい。